

第5話 帰国入試 中学共学校編

さて、受験校研究第3弾、共学校編です。

共学校を目指すことで増える選択肢は、大学付属校か否か、です。第4話で触れた女子校でも大学付属は多いですが、どちらかといえば進学校（大学受験を見越している）と認識されがちです。さっそくですが、見ていきましょう。

付属校の筆頭といえば、慶應義塾湘南藤沢でしょう。場所柄、通学可能な地域が限られてしまいますが、やはり多くの生徒が第一志望として名前を挙げます。また、多くの帰国生に門戸を開き、誰にでもチャンスのある学校と言えそうです。

入試内容を見てみましょう。

試験は英・国・算ですが、英語はエッセイのみの試験なので、準備次第では十分に戦えます。過去の生徒では、英検準2級～2級でも合格は出ています。内容としては、フィクション・ノンフィクションの2題が課されるのですが、例として2012年度の問題を紹介してみます。

①「国際社会に役立つためには、何を知ることが大切だと思いますか。また、そう思う理由も書いてください。」

②「あなたは新しい生物を発見しました。その生物を発見するまでの物語を書きなさい。」

①に関しては、自分の中で予定稿をいくつか用意しておけば、それを転用することで対応ができるでしょう。②に関しても、現実例え結論と、それに至る補足説明をできれば、実は難しいものではありません。

私個人の感想ですが、勝負の分かれ目は算・国だと思います。どちらも一般入試と同じ問題になっているのですが、特に算数は手を抜くことなかれ、です。国語に関しては感覚的な要素も大きいので、日本語力がしっかりしていればそれほど崩れることはありません。算数に関しては、しっかり勉強をして、抑えるところを抑えれば得点ができるが、準備不足では手足が出ないという絶妙な難易度になっています。

裏を返せば、算数で得点をすることで、大きな武器になります。一般入試と共通問題で、決して易しいものではありませんが、みっちり準備をしましょう。

次は、渋谷教育学園渋谷中。帰国生の進学校としては最難関の一つになりました。

ここはとにかく、英語に特化した入試になっています。①英・国・算・面接か、②作文・国・算を選べるのですが、英語圏であれば英語での受験を考えることになります。もちろん作文での受験も出来るのですが、基本的に英語を含まない入試は非英語圏か日本人学校向けのものになります。よほどポジティブな理由が無ければ、面接で対応しきれないでしょう。(英語が苦手だからという理由では、敬遠されるのは必至です)

説明会等で先生が言及することもあります。英語さえしっかり得点できれば、算国は基礎を抑えていけばよい、という合格基準となっています。そして求められるレベルは、英検1級程度のハイレベルなものです。そんな英語偏重の学校ですが、とにかく英語だけ勉強していればよいとは言えません。その内容を見れば、この英語をしっかり得点できる子は、算国や他の勉強も、しっかりこなせる「大人」なのだろうと感じます。必然的に、合格者は算国でもそれなりの得点が取れているでしょう。

この学校を目指す上での対策は、ギリギリまで英語の環境にいること。決して英語以外の勉強にも手を抜かないことです。

さて、この他にもいくつか学校を見ていきましょう。

東京都市大学等々力中

2014年度から帰国入試を開始し、2015年度には英語受験を導入。今後が気になる学校ですね。作文の試験がありますが、奇抜なものではありませんので、準備さえしておけば心配はありません。

この学校で特筆すべきなのが、Ⅰ類とⅡ類というコース設定です。簡単に言えば、Ⅱ類が国公立大を目指す難関コースです。これらは、同一試験で併願することができ、当日の得点でどちらの合格かに分かります。

過去、聖光学院を志望していた生徒のうち、都市大のⅡ類の合格をもらった子は聖光学院も突破、Ⅰ類合格の子は、サクラ咲かず、ということがありました。
2015年度には聖光学院と攻玉社の試験日が重なることもありましたが、今後は都市大の合格種別が、その後の受験校を最終選択する試金石になり得るかもしれません。

神奈川大学付属中

国語・算数の2科目入試のため、日本人学校の生徒は検討することが多いでしょう。ただし、一般入試と同一問題のため、帰国生にとってはそれなりに難易度の高いものになります。難問・奇問は出題されませんが、受験用のテキストをバッチリこなせるくらいの練習量が必要になります。

成蹊中

帰国生の受け入れとしては50年以上の伝統がある学校で、一定の人気があります。3科+面接の一般的な入試形態で、問題難易度もさほど高くありません。帰国生の恩恵を受けやすい学校と言えます。

学習環境や目指す方向によって様々な選択肢が生まれるのが帰国入試です。また、一般入試の評判や偏差値表も全く役に立ちません。

これまでに挙げた学校もほんの一例ですので、気になることがあればどんどんご相談ください。

次回からは、高校入試について考えていきましょう。

著者：谷口 仁
May 10 2016

